

# 新潟県の咳喘息 —アンケート調査から—

新潟県立柿崎病院 藤森勝也

新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学 高田俊範、下条文武

新潟大学医歯学総合病院医科総合診療部 長谷川隆志、鈴木榮一

新潟喘息治療研究会 荒川正昭

**【背景】**咳嗽に関するガイドラインが出て、咳喘息に対する認識が広まってきている。

**【目的】**新潟県の気管支喘息に占める咳喘息の頻度と実態を、アンケート調査する。

**【対象と方法】**2006年9月、10月の2ヶ月間に、新潟県内の多施設で治療していた気管支喘息患者で、アンケート調査に協力した3064例を対象とした。対象症例で、年齢、性、罹病期間、喫煙歴、ピークフローメータ使用状況、過去1年間の喘息発作の程度、ここ2週間の喘息発作の頻度、喘息発作での入院歴、職場に行くと発作が起こりやすいか、ここ2週間の症状、日常生活への満足度をアンケート調査した。同時に担当医師が、重症度、病型（アトピー型か非アトピー型か）、総IgE値、「咳喘息である、咳喘息でない、不明」を記入した。咳喘息症例と咳喘息でない（典型的喘息）症例を比較検討した。

**【結果】**全症例3064例で、「咳喘息である」と主治医が答えたのは、191例(6.2%)であった。大学、病院症例122例、医院症例69例。咳喘息の診断がなされている施設は、全施設115施設中45施設、39%。大学、病院では50%の施設が、医院では32%の施設が診断していた。咳喘息は、典型的喘息と比べて、より若く、女性に多く、罹病期間が短く、喫煙歴がない、職場に行くと発作が起こりやすい、朝、寝る前に咳が出る、日常生活の満足度が低い、重症度はstep1,2が多い、血清IgE値が低い、ロイコトリエン受容体拮抗薬を除く抗アレルギー薬がより多く使われている、であった。